

# 超高層ビルと建築文化

株式会社ニッセイ基礎研究所  
主任研究員  
**土堤内昭雄**  
Akio Doretchi



## 解体される超高層ビル

私が建築学科の学生だった頃、「建築生産論」という講座があった。その中で、「これからは建築をつくる技術とともに、解体する技術に関する研究が重要になる」と教わった。しかし、「建築は凍れる音楽である」という言葉があるように、建築の永遠性に魅了されて建築学科を選んだ当時の私には、それは少なからず衝撃だったことを覚えている。

これまでも多くの建築が解体されてきた。最近では超高層ビルの解体も珍しくない。多くの人の記憶に刻まれた東京のグランドプリンスホ

テル赤坂もすでに姿を消した。丹下健三氏の設計で一九八三年に竣工したが、わずか三〇年での建て替えである。

近年では大手金融機関が合併し、本社統合による本店ビルの解体もみられる。一九七三年に竣工した東京・大手町の旧三和銀行東京ビルは解体され、内幸町の旧長銀本店ビルは一九九三年竣工だが、近々建て替えられる予定だ。いずれも建築界では有名な超高層オフィスビルだった。日本の超高層ビルの歴史はまだ浅く、第一号は一九六八年に竣工した霞が関ビルで、近年大規模な改修工事が行われている。一方、ニューヨーク・マンハッタンには数多くの超高層ビル

いざれ新宿の超高層ビル群の解体も始まるかもしれないが、経済合理性だけを追求し続ける都市づくりは再考されなければならないだろう。なぜなら新たな「建築文化」を育むためには、過去の遺産として歴史的建造物を保存するだけでなく、現役で活躍する建築を新たな時代の要請に合わせながら使い続けるという積極的な「動態保存」が重要だからだ。

## 式年遷宮と建築文化

一昨年十月初旬、伊勢神宮の式年遷宮のクラ イマックスである「遷御の儀」が行われた。第一回遷宮が行われたのは六九〇年で、今回は六二回目となる。今回の遷宮のための一連の行事は平成十七年に始まり、内宮と外宮の正殿の建て替えの他に、神宝や装束など日用調度品も全て新調され、五五〇億円以上の費用を要したという。こうして伊勢神宮では、戦国時代に一時中断したものの、一三〇〇年以上にわたり、古の建築様式をはじめとした伝統・文化を正確に今日に伝承しているのである。

二〇年毎に行われる遷宮だが、なぜ、二〇年毎なのだろう。伊勢神宮の式年遷宮広報本部の公式ウェブサイトには、「定説はないが、二〇年は人生のひとつの区切りであり、技術を伝承す

る合理的な年数」と記されている。また、「式年遷宮は建築物の朽損が理由ではない」とも書かれている。何故なら、木造建築であっても法隆寺のように千数百年の風雪に耐えることが可能だからである。つまり、神宮の「唯一神明造り」は、二〇年毎に造り替えることで、神道の精神の永遠性を目指したものののだろうか。

伊勢神宮の正殿の敷地は、東側が「米座」、西側が「金座」と呼ばれる。昔から正殿が「米座」にあるときは平和で心豊かな「精神の時代」、 「金座」にあるときは波乱、激動の「経済の時代」になると言い伝えられている。経済の循環が式年遷宮と同調するとは限らないが、今後は「金座」への遷宮を機に、アベノミクスや消費税増税など激動の「経済の時代」になると予測するエコノミストもいる。

## 建築文化をつくるという「矜持」

これから神さまが「金座」にいる二〇年間は経済の活性化が大いに期待される。二〇二〇年の東京オリンピックに向けて、国立競技場の建て替えをはじめ、東京では大規模な建築工事が続くだろう。また、築後十数年に過ぎない超高層ビルの建て替え計画もあり、同一敷地で、より高度な技術を駆使し、時代の先端を行く大規

が林立するが、クライスラービル（一九三〇年竣工）、エンパイアステートビル（一九三二年竣工）、ロックフェラーセンターGEBビル（一九三三年竣工）、旧パンナムビル（一九六三年竣工）など五〇年以上経過する超高層ビルは少なくない。

日本の超高層ビルはなぜ短命なのだろう。東日本大震災以降、超高層ビルの耐震性や防災機能の向上が求められ、急速に進むIT化など機能面での陳腐化は想像できるが、それらは技術的に対応が可能だ。しかし、日本の都市はいつも経済効率性を最優先し、スクラップ&ビルドを繰り返してきた。

模範建築物に建て替えられていく。単に経済合理性に基づいて行われる超高層ビルの建て替えと「遷宮」との違いは、そこに先人の培った「建築文化」を継承する強い意思があるのかどうかではないだろうか。

式年遷宮は建築物を建て替える経済活動ではなく、「建築文化」を伝えるひとつの優れた知恵である。二〇年後に行われる次の式年遷宮では、日本は超高齢社会を迎えており、それまでに財政再建を果たし、持続可能な社会保障制度を再構築し、誰もが安心して暮らせる社会づくりを目指さなければならない。次に神さまが「米座」に遷御する時、豊かな「精神の時代」を迎えるためには、「金座」の「経済の時代」こそ、豊かな「建築文化」を育むことを忘れてはならないのではないだろうか。

歴史と文化は「現在」の集積の結果であり、それを育てようとする気概がないところに「建築文化」は育たない。伊勢神宮は二〇年に一度の「遷宮」という建築を解体することで文化を伝承している。建築の解体が「建築文化」の解体であってはならない。建築に携わる者は、「遷宮」にみられるような、過去から営々と続く素晴らしい「建築文化」をつくるという「矜持」を失ってはならないのである。